

2019岡山市芸術祭

岡山市民の文芸

第51回岡山市民文芸祭受賞作品

一般の部

【現代詩】

◎岡山市長賞

グレーゾーンの中で

久山順子

今日は、サボりたいなあと思う
そんなこと、だめだろうと
内なるところが言う。
その反対に、サボれサボれと
内なる心が言うが
そんなこと、出来ないと
外なる、私が反抗する。
内と外とで、せめぎ合うところ。
二つの間で微妙に揺れる。

「おめでとう」の笑顔の裏に、
羨望がちらり、覗く。
貰った人の、努力の勲章。
なのに、何故だかやるせない。
嗚呼、嫌だなあ、こんなところ。

白だ黒だ、YesだNoだと、
二分したがる、世の中で、
はつきり決めれば、角が立つ、
どっちつかずの、グレーが好き。
のらりくらりも、私の流儀。
敵も味方も作らない、私の生き様。
曖昧模糊のグレーゾーンに、
癒されたって、いいじゃないの。
なければなっていたかも、過呼吸に。

白黒グレー、内のところと外のところ。
どっちが善で、どっちが悪なのだろうか。
誰もが持っていないながら、見せない壁の奥。
バランスボール上で、曲芸をする。

高嶺から、これを見下ろす、
厳正中立の、コンダクターが、
居る気がして、ならない。

これからも、息継ぎをしながら、
グレーゾーンの中を、明るく楽しく、
癒されながら、私の流儀で、
泳いでみよう。
ありがとう。グレーゾーン。

友

森 本 恭 子

僕は 左上一番奥が住みかの第三大臼歯だ
ここの主とは 三十年ほど共にしている
毎日 運ばれる食べ物に出会うと
すぐに咀嚼が繰り返される
それは 僕の得意なものや苦手なもの
いろんなものがやって来る
いつか ベーコンが挟まって困っている
何度も舌先を当てて取ってくれた

「左上奥が小さな初期虫歯です
親知らずだから抜きましょう」
ある夏の日 人生で虫歯とは無縁の彼女が
歯医者さんから 突然 宣告された
早々に 僕がいなくなることが決まった夜
暗闇の中で友との別れを悲しんだ
僕は 周りの仲間たちに支えてもらい
誰も欠けることなく元気に逞しく育ったのだ

二週間後の約束の日 僕の土台に
立て続けに太い針が二本打たれ
彼女の口は 横広がり大きく開けられた
すると 銀色の道具は容赦なく
洞窟の探検みたいに グイと進入する
僕には太く立派な根が奥深くあるらしい
小刻みに数回揺らされると
鈍く光る鋭利な金属に捕らえられて
スポンと 根元から抜かれてしまった
僕は涙も出ず 虚ろなまま降参した

小さな容器には もはや誰の物でもない
抜け殻のような僕がいた
彼女は 僕が懸命に根を張り生きた姿が
自分の分身を見ているようだと言っていた
でも 僕の使命はこれで終わりだ
僕自身の歯形さえ残せないまま
彼女は僕のあずかり知らぬ所で歩き始める
容器の蓋がカチリと閉じられたとき
小さく サヨウナラ とだけ呟いた
昔から 何度も口ずさんだはずなのに
僕は彼女の名前さえ思い出せなかった

青へと

高山秋津

見上げれば
真つ青に刷り上がった空だ
祝福のような青だ
胸の中のコップに
清水が光りながら注がれる
何でもない朝なのに
何故こんなに満ち足りた思いになるのだろう
ここにこうして居ると言うことが
誇らしくさえ思えるのだ
この場所へ私を連れて来た者
私を この美しい空の下へ立たせた者
母がいる 祖母がいる その母がいる
その時 その時
その場にしっかりと軸足を置き
揺るぎない強さで歩んできた時間がある
生から生へと繋いできた道がある
彼女たちも空を見上げれば
大空は
厳然と空を湛えていたはずだ
突き抜ける聡明な青に
幾度となく励まされたに違いない
折角の私の存在
私の在り処
今 自分に問えば
答えを告げる声が
空の遙か彼方から聞こえてくる
いや 声のように思えたが
それは
空の粒子が弾ける音だったのか
光を吸って飢いた青は ただ静かだ
空への回帰を秘め
私はゆっくり
青へと溶かされていく

◇岡山市教育委員会教育長賞

宇宙船に暮らす

七

雲

冷蔵庫の中の蓄えが減れば
食料が搬入される
飲料が補給される
蓄えが途切れないように

老いや病や痛みがまとわりついて
自分の気持ちだけではここから出られない
閉じこめられた空間で生活する
この小さな家は宇宙船
愛する小さな宇宙船

こまめに横たわり 体力を充電
世の中の出来事を知るにはラジオ
置き場を両手で確認 補聴器
ドクターとの連絡に電話
SOSのためにも手元に常備

心は毎日生まれ直す
朝 目が覚めたら 自分に「おめでとう」
夜 目を閉じるとき「皆さん、ありがとう」
大切に両手で握っておく この二つの言葉

一日に何度もうたた寝をする
目覚めた瞬間は 時刻も自分も見失う
その隙について
暴れまわる巨大化した不安と屈託と諦年
負けるかもしれない 今はまだ負けたくない
闇の先にぼっと灯る明りにすがりつく
正面を向くこの顔を 涙が洗い流してくれた

朝から夜までが 私の一生
昨日は前世 明日は来世
小さな宇宙船で
今日も 小さな一生が終わる
明日は どんな一生が始まるのだろう

時間の輪が切れるまで繰り返す
目を開けたときに「おめでとう」
目を閉じるときに「ありがとう」
宇宙船を去る日は 花の季節であって欲しい

母の手

うさぎのシツポ

母が僕をお医者さんに連れて行ったとき

母の手は温かった

母の手は大きかった

母の手は何でも知っていた

僕が徒競走で一等賞を取ったとき

母の手は白かった

母の手は長かった

母の手は強かった

母の手はお日様のようだった

僕が母を病院に連れてったとき

母の手は冷たかった

母の手は小さかった

母の手は頑固だった

僕が嫁を連れて実家に帰ったとき

母の手は黒かった

母の手は皺だらけだった

母の手は弱かった

母の手は干からびた干し柿のようだった

母の手

薬指と中指にまかれた

バンドエイドの茶色には

血が赤く滲んでいた

母の手は

僕の病気を治してくれるたびに

皺くちやの手になっていった

まるで魔法を使い果たした

魔女の手のように

世の中に億千万の母の手あれど

わが母の手に勝る手は無し

【短 歌】

◎岡山市長賞

ねむころに高祖母ら挽きし石臼とふ明治が遠く背戸に踞す

西崎 淑子

◇岡山市教育委員会教育長賞

溜池の水を頼りに米作り樋門が開けば始まる今年

成 本 二三子

山裾の苔むしてゐる石塊は無縁墓ならむつつじは真盛り

吉 見 節子

紅葉葉の茜の色が映える道車椅子たたきリズムとる母

石 井 佳子

こまやかに花の連なる水引草かたへ行く時揺るるくれなゐ

水 島 公子

【俳 句】

◎岡山市長賞

該当作品なし

◇岡山市教育委員会教育長賞

連中と落とす隈取り夏終る

三 好 泥子

舟に舟繋がれてゐる星まつり

横 山 喜代子

本殿の太き柱や蟻地獄

小 橋 さちえ

とろ箱の詰め放題の鰯ひかる

井 脇 千代子

【川 柳】

◎岡山市長賞

母からの宅配のひもゆるくなる

岩 崎 弘舟

◇岡山市教育委員会教育長賞

聞き役になつて周りがよく見える

宮 本 信吉

逆風に踏ん張る父の樹が揺れる

吉 田 早苗

幸せは笑顔経由で来るらしい

唐 川 幹代

生きてるっていいな今日も汗をかく

太 田 睦美

【随筆】

◎岡山市長賞

猫に備前焼

大森 博 巳

うちの猫は備前焼の器を使っている。飲み水を入れるのだ。猫のために奮発した。

そもそも、猫の特性を知らず飼いはじめた。呼んでも来ない。シッポの先でわずかに合図をよこすだけだ。聞こえていても、動かない。飼い主の要望は一蹴される。ある時、ニボシで誘うと飛んできた。袋を開く気配さえ察知する。ガサガサと開封する音を立てるだけで、どこからともなく現れる。ただ、猫を騙す禁じ手を乱用したのは失敗だった。呼び寄せるためには本物のニボシをやらざるをえなくなった。まずいことは、尿路結石を発症させてから分かった。獣医師に

「ニボシは厳禁。再発予防のため療法食だけを与えて、できるだけ水分をとらせましょう」

と言われた。だが、健康管理に頓着があるとは思えない猫である。どうやって大量の水を飲ませるのだ？愛猫家は計量カップで飲む水の量まで把握しているのだろうか。初心者マーク付きの真面目な飼い主は悩んだ。

相手は猫だ。策をろうしても無駄だろう。さしを投げかけたそのときだった。四半世紀も前のことを思い出した。碧い目の備前焼作家が愛犬のために立派な平皿を使っていたのだ。ドックフードがこんもり盛られた光景から閃いた。

犬に使ってよいのだから、猫に使って何が悪い。それに、古来より水を腐らせないといわれる備前焼だ。それが本当ならば水はおいしくなるはずだ。然らば、猫がたっぷり水を飲むかもしれないではないか。

運よく「備前焼まつり」が近づいていた。履きなれた靴で、ともかく向かった。そこで見つけたのが、ただいま愛用中の切立鉢だ。出会った瞬間、安定感抜群の姿に目が釘付けになった。本来は漬物などが入れられる「香物入れ」だ。けれど、径が十二センチほどで縁がほぼ垂直で、高台を含めても五センチほどの高さは猫にぴったりだった。

戦利品を持ち帰り、ステンレスのボウルと交換した。猫は見慣れぬ土色の物体を丹念にかきまわり、たやすように一口二口飲んだ。それから、ひれ伏すかのようにしゃがみこみ、その水を味わい始めた。飼い主の思い通りになったためしはない。それなのに、備前焼はあっさりと猫を懐柔してしまった。

摩訶不思議なチカラを持つこの器を毎日洗う。そして大切に水を入れ替える。朝から夕方まで置いていても、水は透き通っている。

今日もリズムよく、ピチャピチャピチャピチャという音が響いてくる。器の中には丸い波紋が広がっている。その後は決まって勢いよく音を立てて放尿する。心地よい音と愉快で爽快な音を聞く度に、ほくそ笑む。

おろかな飼い主は、猫と備前焼の話をどこでも自画自賛する。自制心を、どこかに置き忘れてきたのだろうか。いや、違う。自制心などというものを持っているならば、猫と暮らすことは出来ないのである。

さよなら、たつしやでな

あまんじやく ももこ

昨秋、街中にある仕事場の玄関前に鉢植えのビオラを置いた。春にはこんもりと茂り、たくさんの花を咲かせたが、そうだったのも束の間、茎の辺りがすかすかと風通し良くなってきた。誰かが葉っぱを食べているのか。犯人を捜す。そこには黒い身体に赤い模様のイモ虫が二匹おり、おいしそうに葉っぱにかぶりついてきた。どおりで葉っぱが減るはずである。

その赤黒のイモ虫はツマグロヒョウモンという蝶の幼虫である。モンシロ蝶より大きく、アゲハ蝶より小さい。翅は柿色に黒い模様が入った豹柄である。メスはその豹柄の翅の先が青っぽい黒で白い帯がかかっている。幼虫の食草はビオラである。親蝶は、こんな街中のビオラをよく見つけたものだ。このイモ虫が蝶になるのを楽しみに、ビオラを彼らの住みかとして提供してやることにした。

幼虫はビオラの中をあちこちへ移動する。毎日その姿を探しては生存を確認した。幼虫はモリモリ大きくなった。ある日、一匹の幼虫が縮こまって動かない。腹でも痛いのか。しばらくすると、脱皮した皮が残されて幼虫は元氣を取り戻していた。よかった、病氣じゃなかった。それから数日後、二匹ともどうにも見つからない。とうとう鳥にやられたかと胸を痛めたが、一匹は看板の下で、もう一匹は鉢植えのバラの枝先で、蛹となってぶらさがっていた。ツマグロヒョウモンの蛹の特徴、六つの金ボタンがピカピカと光っていた。蛹になってから十日目、仕事の合間に外に出てみると、看板の下で蛹が成虫になって、脱いだばかりの蛹の殻につかまってじっとしていた。翅をしっかりと閉じているので鮮やかな豹柄は見る事ができない。バラの枝先のほうの蛹も羽化が近いはずだ。じっと見つめる。すると蛹がピクリと動いた。蛹の背中が割れ、翅がくしやくしやの蝶が姿を現した。その翅も数分のうちに大きくピンと伸びたが、やはり閉じたままである。翅を開いて飛び立つのを見たい。看板の下の一匹をじっと見つめて飛び立つのを待った。ご近所さんを通りかかり、言葉を交わすために目を離れた。次に見ると、その姿は消えていた。残念。でも、もう一匹がいる。次の休憩までに飛び去ってしまったぬよう、バラの枝先でじっとしている蝶に大きな袋をかけて仕事に戻った。

次の休憩時間、そっと袋を取って中をのぞきこんだ。袋の底でツマグロヒョウモンが、真新しいくつきりとした豹柄の翅を広げて静かにとまっていた。翅先が青黒いメスだ。凜としたその姿はどこか堂々としていた。「さあ、出ておいで」と声をかけて袋を少しゆすった。蝶はにわかに飛び立って袋から出ると、そのままぐんぐんと高く舞い上がり、青く晴れた空の彼方に消えていった。それまでの姿からは想像もできない、一瞬の迷いもない力強い旅立ちであった。

姿が見えなくなった空を見上げながら「さよなら、たつしやでな」とひとりつぶやいた。

碁打ちのひとり言

片山 皓 右

地域の囲碁好きが公民館に集まって週二回打っている。四十人を超えるから棋友会という組織を造り、それぞれが棋力に応じて手合いをし、成績がいいと昇格する決まりになっている。

昔は囲碁も将棋も愛好家が多く、子供のころから大人に教わり、成人しても機会があれば楽しんだ。縁台将棋は夏の風物詩であった。今はどうか。テレビゲームやスマホの普及で面倒な囲碁・将棋などに手を出す者はごく少なくなった。だから我が棋友会も平均年齢七十三を超える。最高九十四歳である。

囲碁というものは当然ながら棋力によって順列を付ける。強い奴が上である。アマチュアでは普通七段が最高位とされている。要するに対局して勝つ人が上にゆく。だから内心では此奴には絶対に勝つと決めながら、口では「宜しくお願いします」と下出にでる。弱いふりをして相手に油断させようという魂胆でもある。中には鷹揚に構えて相手を睥睨し、外見で圧倒しようとする作戦を立てる者もいる。しかし対局していて面白いのは、勝負もさることながら相手の気質までも読めることだ。碁笥の中に手を入れてジャラジャラいわせながらなかなか打たない人がいる。決心がつかなくて別の動作で誤魔化しているのだ。恐らくこの人は職場で周りに気を遣いながら仕事をしていたに違いない。優柔不断といえれば失礼だが、高段者には余り見かけない。気配りが大変だっただろう。同情しきり。

また碁石は持つのだが、盤上で手をひらひらさせて置こうとしない者もいる。もつとひどいのは石を置いてそのまま手を放そうとしない。頭で考えるのではなく、自分がそう打つと形成はどうか目で試している。この人は部課長クラスの経験者で職場でもかなり無理難題を通したのではあるまいか。

一方ではじつと考えて、打つ瞬間に碁笥に手を入れぴしりと決める人もいる。血の筋の浮き出たひとさし指の爪と中指の腹でちゃんと挟んでいる。対局姿勢もいい。こういう人を見ると心が和む。

時に堂々と打ち進め、こりやどう見ても中押し負けだと覚悟を決めた時、急に失着を打たれ、こちらが逆転勝ちをすることがある。嬉しいには違いないが、どうしたのかと訝しむ。ひよつとして身内に不幸でもあったのではないかと、あらぬ想像をしてしまう。

ここに集まるお年寄りたちは、恐らく囲碁が唯一の楽しみだろうと思う。対局の合間の会話には必ず笑いが入る。もちろん出席率が高い。特に月一度の月例囲碁大会には殆ど全員が出席する。そこで五勝すればワンランク上がる。今まで対等だった人にずっと黒石を持たせるのだから気分は上々だろう。遠い人は車で四十分もかけて参加する。例の九十四歳の長老がいう。

「死ぬまで打ちたいのう」

コンビニ婆さん

佐藤 幸枝

私は八十四歳。昔タイプの人間らしく、冷蔵庫に長い期間、物を保存しておくことの嫌いな人間。新鮮な魚や野菜を買い求めに、毎日昔でいう市場、今日ではスーパーマーケットへせっせとお買い物に出かけていました。道すがら、かつての農業用水が残っていて少々の幅もあるので、昔の小川のように、水の色や流れの変化を眺めたり、並んでいる住宅の塀沿いに草花が小さく咲いているのを見つけては春がやってきたと喜んだり、まるで季節の変化と会話しているかのように通っていました。

ところが庄迫骨折を患い、その後遺症で歩行困難になった近頃は、スーパーマーケットまで歩けないので仕方なく家から一番近い国道沿いのコンビニへ買い物に行くようになりました。車が流れるように通る国道。しかも十字交差点があるので、縦と横の二通りの信号機を渡り、わずか五分ほどの短い道のりですが、やたらと神経を使い、やっとの思いでコンビニにたどり着くのでした。

コンビニは、これまでときどき、入り口付近に並べてある新聞を買いに行くとか、たまにコピー機を拝借するくらいに馴染みの薄い場所でした。今回必要に迫られて訪れ、初めて店内をじっくり眺めながら驚きました。誰もがおなじみのおむすびやお弁当以外に、「豆腐の白和え」、「小芋とイカの煮つけ」をはじめ「いわしの梅干し煮」、「サバの塩焼き」などが、いずれもおいしいそうなラベルを張り付けたおひとり様用の容器に収まって並んでいるのです。何だかとてもおいしそうです。

「本当においしいのかしら？」と思いながら商魂の逞しさに感心するのです。通路わきにはホウレンソウ、大根、それにナスやトマトなど生鮮野菜もわずかですが揃えてありました。不思議なことにコンビニまで歩けるようになったという達成感とここまでくれば多少の食品が手に入るという安堵感とで気分がすっかり落ち着きました。若者向きの食品が並ぶ棚を眺めながら私自身も若くなったような気分です。「今晩は何を：？」と献立を考えるのも乙なものです。私のような年寄りにはチンと鳴らして出来上がりのファーストフードにはさすがに手が出せません。ナスの輪切りをフライパンで焼いてカツオと刻みねぎをかけ、しょうゆを垂らすだけの「焼きナス」。ジャガイモを千切りにして、塩コショウで味付けだけでバターでいためる「ジャガイモ炒め」。大根を細く千切りにして塩もみし、酢をかけて「おなます」と、たちまち簡単な手造り料理が浮かんできます。

こんな風に少しずつつゆつくりと頭を回転させていると、歩けなくなったという悲壮感がだんだんと薄らいで、考えることの楽しさを覚えるようになります。今では、親しみを込めて眺めているうちに棚の商品の方から何か語りかけてくるかもしれないと期待をふくらませながら、せっせとコンビニさんに通っていきます。

小麦色の彼女

西崎 良子

「電気なければただの箱」。どこかで聞いたことのあるこの言葉どおり、朝、目覚めてみると、冷蔵庫がただの箱になっていた。周囲水浸しというおまけつき。真夏まつ只中というダメ押し付きで。もはや絶望を通り越して、笑いが込み上げてきた。

冷蔵庫の扉を開ける時は、未知との遭遇にワクワクすらした。「中はどうなっているんだろう。そういうえば、数日前から変な音がしていたなあ」。

庫内の様子は、想像した通りの惨状だった。想定内のこととはいえ、文句を言う相手もなく、広げたゴミ袋の中に溶けた食品を放り込むだけの、ため息の出る作業だった。サヨナラ冷凍食品たち。ちよつとだけ未練は、今日食べようと取っておいた大好きな高級？アイスクリームだ……残念。

そんなことより、この猛暑の中、冷蔵庫なしで一時もいられはしない。すぐに調達しなければ。近所の電器店に電話で尋ねるも、数日はかかるとの返事だった。それは困る、一日も待ってなどいられるものか。

時間を見計らって、郊外の大型家電店へ車を走らせ、開店と同時に冷蔵庫売り場へまっしぐら。どうせなら、最新の多機能なものが欲しかったのだが、現状ではそのような選択肢などない。何でもいい、今日中に欲しいのだ。売り場の店員さんに状況を伝え、声高に「今日中に、今日中に」を連呼した。

交渉の結果、今日中に届けられるのは、展示品の一、二種に限られた。それは、長く展示されていたらしく、型も古くうっすら埃すら被っているようだった。それでも今日のうちに届くとあって、まあいいか、と即決した。

その日の午後、新しい？冷蔵庫はやって来て、壊れた前任者と入れ替わった。仕方なかったとはいえ、望まれないままこちらの都合に翻弄された、気の毒な冷蔵庫でもあった。

「変な色じやなあ」

「製氷器が自動じゃないがー」

「使い勝手が悪いなあ」

家族の散々な雑言の中、新冷蔵庫は、一言の反論もせず、黙々と仕事を始めた。

昨日までの、隙間もなくぎゅうぎゅう詰め庫内に比べれば、広びろと明るく、何と自由でさわやかなことだろう。

改めて眺めてみれば、茶色のボディも個性的で素敵ではないか。製氷も、水を入れる一手間だけではないか。そして、何よりも静かではないか。

扉の内側に貼ってある説明書を剥がしながら、乾いたタオルで丁寧に、内から外へと拭いた。「これから宜しく頼みますよ」と、扉を静かに閉めた時、「まかせて下さい」と、小麦色の肌の彼女は、力強く答えてくれた。

明日は、高級？アイスクリームを入れよう。